

～ News Letter ～

H29.10.24

第4回九州保育三団体青年部研修会 鹿児島県大会

平成29年10月24日(火)～25日(水)鹿児島県(鹿児島サンロイヤルホテル)にて第4回九州保育三団体青年部研修会鹿児島県大会が開催された。

始めに主催者である社会福祉法人日本保育協会九州地区連合会青年部代表 牛島健裕氏と、公益社団法人全国私立保育園連盟青年会議九州ブロック代表 横山和明氏による挨拶があり、大会開催への感謝の言葉を述べられた。

また今大会実行委員長の日高真琴氏も、台風が来たにもかかわらず200名の参加があり“九州は一つ”ということを再認識できたというお礼と、これから始まる大会でこの絆をもっと強いものにしたという意気込みを述べられた。

講演Iでは、作家で芸術家でもある元埼玉県教育委員長 松井和氏より『子育てから生まれる親心と絆～幼児の願いを考えずに少子化対策を進める愚～』と題し、10年前に保育園の園長先生たちと作られた『親心を育む会』で行った『一日保育士体験』から、保育園と親との信頼関係や子どもとの絆が深まっていく様子を紹介された。また、親だけでなく中高生の保育士体験においても赤ちゃんは様々な周りの人々の絆を育てるということ、そしてその体験から親は、保育士の持つ“まず子どもたちのことを考える”という貴重な人生観に気づくことができるということを語られた。

昨今親たちの子育てに関する意識の変化により、家で子どもと一緒にいる時間が「重荷」「負担」という認識に近づいている、子どもたちの最善の利益を守るためにも、この『子育てを中心にした絆の復活』を早急に取り入れていかなければならないと感じた。

情報交換会では、軽快なジャグリングから迫力のあるイリュージョンをこなすパフォーマーの K@ITO(北方海渡さん)による幻想的なショーが行われ、大会の熱気は最高潮に達していた。



大会 2 日目の講演Ⅱは、東京家政大学子ども学科教授 那須信樹氏による『子ども・子育て支援新制度下における保育・幼児教育の新展開～「期待される」専門性から「求められる」専門性～』の講演が行われた。まず保育所保育指針および認定こども園教育・保育要領の改定について、新旧要領を見比べながらポイントを押さえていき、そこから見える保育の原点『養護』と『乳児保育(ここでは主に 0 歳児)における保育』が重要視されたこと、今まで見えにくかった日本古来の『よりそう保育』を更に可視化し私たち保育者の専門性を高めていくことの必要性について講演された。

講演Ⅲでは、東京大学公共政策大学院客員教授で野村総合研究所顧問 増田寛也氏による『地方創生に、今、必要なこと』の講演があり、急速な少子化と地域格差が続く 20 年後、30 年後の未来で地方都市はどのようにして人材還流の可能性を探るべきなのか、“成長可能性都市”としてポテンシャルランキング 2 位の鹿児島を例にし、暮らしている人の満足度や地元愛などから、安心して子育てできる環境の一つとして保育所も大きな役割を担っていることを語られた。

午後の鼎談では『地方創生と子ども・子育て支援』と題し、シンポジストの鹿児島県大島郡徳之島町長である高岡秀規が、高校進学と共に若い人材が島を離れ人口減少が続いていた徳之島を、どのようにして人口増加に加え合計特殊出生率上位に入るほどに変えていくことができたのか、町単独による子育て支援や子育て拠点施設の活用、またプログラミング教育等も取り入れ子どもたちの可能性が最大限に発揮できるような環境づくりの取り組みを紹介された。

次に保育園を考える親の会代表の普光院亜紀氏が、現代社会における問題『母親カプセル』『家庭の孤独』について、地域や他者との繋がり希薄な保護者を保育所がどのようにフォローしていくべきか、また待機児童解消に向けた急整備による保育の質の低下について、保護者として、また働く女性としての視点も交えながら講演された。

また、増田寛也氏をコーディネーターとしてお迎えし、シンポジストの高岡秀規氏と普光院亜紀氏を交えての鼎談が行われた。

最後に主管者挨拶として鹿児島県子ども子育て青年会会長 川東敬氏が今大会参加者へ感謝の意を述べ、次期開催地の福岡県大会実行委員長による大会への PR で会場が盛り上がり閉会した。

大会終了後、別室にて九州保育三団体青年部協議会代表者会議が行われた。次期福岡県大会や宮崎県プレ大会への議論がなされ、青年部の熱い情熱を間近で見ることができとても良い経験ができた。

